

家庭愛和こそ「実践一番」

上 廣 榮 治

強い温かな南風が吹くと、本格的な春がやって来ます。これが「春一番」と呼ばれる風で、もともと
は彦岐の漁師さんたちが名づけた風の名前だそうです。この風を受けて一斉に木の芽がほころび始める、
と歳時記にあります。春一番に続いて、春二番、三番が吹き、春四番まであることが多いようですが、
やがて桜が咲いて春爛漫に至るのです。

この、春を呼ぶ春一番と同じように、私たちを仕合わせに導く先駆けの実践、「実践一番」というも
のもあるのではないかと、ふと思いました。ある一つの実践が、次から次へと新たな実践を呼んで仕合
わせを花開かせてゆく、そんなきつかけとなる大切な実践です。

では、その「実践一番」とは何かと申しますと、「最も近い人との愛和」だと思っています。最も近し
い人、つまり、生活の基盤を共に担う人に対する愛和の実践です。その実践が充実していれば、ちよう
ど春一番の後に春二番、三番がやって来て木の芽をほころばせるように、実践二番、三番が続き、実践

の実^{じつ}が上がっていく、そんな実践です。

「最も近い人」とは、結婚されているならもちろん伴侶^{はんりよ}です。お独りの方の場合には、親や兄弟、師や親友など、それぞれの方にとって、最も大切な人、つまり日々を生き貫^ぬくうえで最も身近な人のことだと思ってください。ただし、好きな人、気に入っている人だからといって、誰彼と勝手に決めてはなりません。「近い人」には、順序序列というものがあるのです。例えば、伴侶や親子を飛び越えて、家族以外の人を最も近い人だとしてしまうと、生活の基盤^{きばん}がいびつになって、夫婦や家族で築いてきた暮らしの調和が崩れてしまいます。

私たちは何よりもまず、「今」の、足元の暮らしをよりよいものに改善し、仕合わせなものにするためにこそ、日々実践に励んでいるのです。実践一番とは、そうした実践でなければなりません。そのためにいちばん大切な人、それが私が申し上げている最も近い人なのです。

さてあなたは、その最も近い人と真に愛和しているでしょうか。相手に不足や不満を持ってはいませんか。相手があるがままに認める、つまり現実大肯定^{こっぽう}の骨法^{こつぽう}で、その人と愛和していますか。絶え間なく気配^{あふ}りし、溢^{あふ}れるように愛を発動させているでしょうか。

意外なことに、謙虚で寛容で真に実践者の鏡ではないかと思われる人が、実は夫婦仲^{あひな}がよろしくない、という例に出合うことがあります。また、日常よく徳を積み、実践^{まいたしんしょうじん}に邁進^{まいしん}精進^{しやうじん}なさっているのに、なかなか実践の実^{じつ}が上がらない。一生懸命に頑張っているのに諸事^{しよじ}うまくいかないと、お悩みの方もおられます。ところが、そうした方々の場合、判で押ししたように最も近い人との間に溝^{みぞ}があったり、トラブルがあったりするのです。

繰り返しますが、「最も近い人」とは、あなたと生活の基盤^{きばん}を共にする人です。そこに問題があれ

ば、いくら努力しても結果が出ないのは当然です。大もとを放っておいて、どんなに努力を重ねても、砂上に楼閣を築くと同じだということは、子どもでもわかる理屈です。しかし、理屈としては自明でも、実際に最も近い人と愛和するということは、意外に難しいことなのかもしれません。なぜなら、「最も近い人」とは「最も親しい人」でもあるからです。

夫婦や親子は、互いに最も親しい仲であるために、かえって相手に対する思いやりを忘れがちです。親しいからわかっているはずだという独善にも陥ります。「親しき仲にも礼儀あり」とは、親しさに狎れ、遠慮や配慮を忘れると、思わぬ破綻を招くぞという戒めです。

どんなに親しいからといって、非礼に扱われたり、暴言を吐かれれば腹が立ちます。自分に無関心であるかのように見えれば、近しいだけに、その分よけいに深く傷つきます。

最も近い人とのいさかいの原因はさまざまですが、どのような原因に発するいさかいても、それがこじれてしまうのは、一方が、あるいは双方が、相手に対して日頃から不満を募らせているからなのです。そしてその不満の最たるものこそ、相手の、自分に対する無関心、これに尽きると思います。相手の思いへの配慮の不足、相手まかせという無責任、仕事にかまけての無視、いずれも「私に関心が無いのだ」と思い込ませてしまう原因です。実践にかまけて家庭をおろそかにするという、本末転倒の例々であるのです。

夫婦間の争いを避けるために干渉しないのだ。注意すれば言い合いになる。だから、口を出さずに好きなようにさせているのだ、という方がいます。もちろん、それは間違いです。愛和に至るためには、常に相手に働きかけ続けなければなりません。たとえ、注意や小言でも、相手に対する思いやりさえ込められていれば、十分にわかり合えるはずで

古代ローマには夫婦喧嘩の神様というものがあつたといひます。陽気なローマ人のことですから、昔から夫婦喧嘩も派手なもので、ささいなことから死ぬの殺すのという大喧嘩になります。そんなとき、二人で夫婦喧嘩の神様の祠ほこらに出掛け、神様に向かつて、それぞれの言い分を訴えるのです。ただし、ここには一つのルールがあつて、二人同時にしゃべつてはいけないことになっています。つまり、片方が神様に相手の非を訴えている間、一方は黙つてそれを聞いていなければなりません。代わり番に延々とそれぞれの言い分を訴え、また聞いていると、頭に上つた血も収まつて、自分にも悪いところがあつたと気づき、いつの間にか仲直りして帰ることになります。相手の言うことにも耳を傾ける。相手の立場に立つて考える。これこそ夫婦喧嘩を収める秘策です。

愛和の鍵は相手に対する気づかいのあるなしなのです。相手に関心を払つていれば、相手の気持ちを無視した暴言や非情な行為はしないはずで、自分の思いどおりに説き伏せようとか、服従させようという、力まかせの無理もできないはずで、もちろん皆様は、「人の悪をいわず、己の善を語りません」と誓つている方々ですから、夫婦喧嘩などとは無縁でしょうが……。

特に夫婦をはじめとする「最も近い人」とは、お互いの裏の裏まで知り合つた相手です。ですから、口先だけのごまかしも言い訳も通用しません。実践こそが大切なのです。

明日の朝、早起きをして、この瞬間からすべてが新しく始まるのだ、過去の過あやまちはみんな忘れて、「最も近い人」と共に新しく大地に生き貫くのだ、と誓つてみましょう。まず、「最も近い人」に対して、「朝の誓」を素直に実践してみましよう。その実践が自然にできれば、次の実践ははるかに容易になつて、実践二番、三番が連続し、あなたは仕合わせに向かつて、大きな一歩を踏み出すことになるでしょう。